

オレンジ肉色の干し芋用品種「ほしあかね」の安定栽培法

農業総合センター農業研究所

令和2年に国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構により品種登録出願公表された「ほしあかね」は、オレンジ肉色の干し芋用品種です。近年、サツマイモ需要が高まり、干し芋も高値で取引されるなか、オレンジ色の干し芋は多様な商品の一つとして有望です。

しかし、「ほしあかね」は過肥大しやすく、加工に不適な3L以上のサイズが多くなることや、肉色のオレンジ色がばらつくことから、これらを解決するための安定栽培法を確立しました。

加工に向く芋の収量向上

加工に適したLサイズ（350～500g）の芋を多く得るためには、5月中旬に挿苗し、140日程度で収穫します（図1）。6月以降に挿苗すると収量が低下することや、在圃日数が長いと過肥大することに注意が必要です。

また、株間を20～25cmで挿苗するとLサイズの芋が多く得られますが、30cm以上になると過肥大が問題になります。

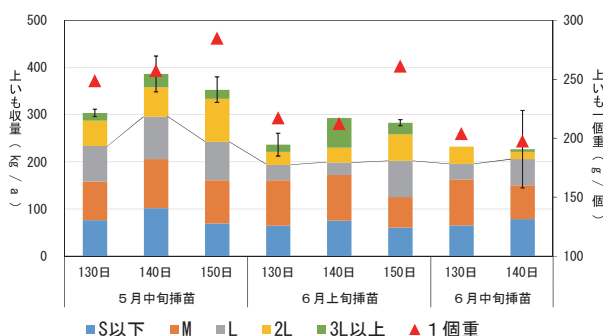


図1 挿苗時期毎の在圃日数と収量、1個重

表1 栽培条件の違いと干し芋加工後の肉色

苗の種類	非フリ一苗（種芋）				
	5月中旬			6月上旬	
挿苗時期	130日	140日	150日	130日	150日
在圃日数	130日	140日	150日	130日	150日
a*値	13.6 a	13.4 ab	12.9 ab	11.6 ab	11.5 b
標準偏差 n=25	1.7	2.3	2.4	2.7	2.4
干し芋の様子					

注1) a*値（値が高いほど色鮮やかな赤であることを表す）、コニカミノルタ製CR-410型彩色差計で測定。

注2) Tukeyの多重比較を行った。異なる英文字間で有意差有りを示す（p<0.05）。

肉色の向上

5月中に挿苗することで、干し芋加工後の肉色の赤みを示すa*値が安定して高くなります（表1）。一方、6月以降の挿苗ではa*値が低くなり、ばらつきの度合いを示す標準偏差の値が大きくなりました。

肉色の安定した干し芋を作るためには、5月中の挿苗が重要です。

安定栽培法の導入効果

最適な挿苗時期と在圃日数（5月中旬・140日）で栽培することにより、干し芋加工に向く規格の収量（上いも重）が向上し、上いも重が少ない挿苗時期と在圃日数の組み合わせ（6月中旬・140日）に比べると、粗収益は10aあたり15万7千円高くなりました（表2）。

今後は「ほしあかね」導入農家に向けて技術の普及を推進する予定です。

表2 挿苗時期等と粗収益

試験区	上いも重	干しいもA品製品量	粗収益	安定栽培法を活用したときの差額
	(kg/10a)	(kg/10a)	(千円/10a)	(千円/10a)
5月中旬挿苗 140日	1941	314	430	-
6月中旬挿苗 140日	1232	200	273	-157

注1) 上いも重は加工に適したM～L品収量とした。

注2) 干しいも製品量は、歩留まりを20%とした。

注3) A品製品量はシロタ程度から試算した。

注4) 単価は1367円/kg（平成30年度経営指標より）。